

【主題】 2 歳児における指先を育てることの大切さ

【副題】 遊びを通した手指の発達と人との関わりの広がり

【クラス名】 らっこ組

1. 主題設定と研究理由

2 歳児は自我が芽生え、「自分でやりたい」という気持ちが強くなる時期である。着替えや食事、遊びの場面でも、自分からやろうとする姿が増えてくるが、指先の動きはまだ十分に発達していないため、思うようにできず、怒ったり泣いたりする姿も多く見られる。文部科学省 が示す「幼稚園教育要領」では、幼児期は身の回りの環境と関わりながら、さまざまな力を総合的に育んでいく時期であるとされている。特に2 歳児は、手や指を使って実際に触れたり、つまんだりする具体的な体験を重ねることで、生活習慣の基礎だけでなく、考える力や集中する力も育っていく。

また、指先の発達は体の成長だけにとどまらず、

- ・「できた」という達成感を味わうこと
- ・友達のしていることに興味をもつこと
- ・同じ遊びを一緒に楽しむこと

といった心の育ちや、人との関わりにもつながっている。

本クラスでも成長と共に、「貸して」「一緒にやろう」といったやりとりが増えてきたが、その一方で、うまく扱えないことから取り合いやトラブルになる場面も見られた。このことから、指先の育ちは「自分でできることが増える」という自立だけでなく、

- ・友達と同じ場で遊び続ける力
- ・気持ちを共有する経験
- ・やりとりを通して関係を築く力

にもつながっていくと考えた。

そこで本研究では、2 歳児の発達に合った指先を使う遊びや活動を計画的に取り入れ、その過程の中で、手指の育ちと人との関わりがどのように変化していくのかを捉えていくことを目的とした。

2. 実践内容

① 制作活動

進級当初の子どもたちは、紙をちぎる、道具を持つといった基本的な手指操作がまだ十分に育っていない姿

が多く見られた。そこでまずは「できる・できない」よりも、素材に触れ、楽しむことを第一に考えた。まず絵の具やクレヨン、ポンキープENCILなど、素材や抵抗感の異なる道具を用い、なぐり描きを十分に楽しむ時間を確保した。絵の具では大きな紙に好きな大きさの丸を描く活動を取り入れ、のびのびと腕全体を使う経験を重ねた。回数を重ねる中で、徐々に筆やクレヨンの持ち方にも目を向け、「こうすると描きやすいね」とさりげなく伝え、無理なく意識づけを行った。夏には戸外で手に直接絵の具をつけ、大きな模造紙に自由に表現する活動を行った。指や手のひらで広げる、叩く、混ぜるといった感触遊びを通して、素材の変化を全身で感じる姿が見られた。直接肌で確かめる経験は、手指の感覚を豊かにし、その後の手先の発達にもつながっていった。



紙をちぎることが難しかったため、初めは柔らかいお花紙や切り込みを入れた折り紙を用いて“破く感覚”を経験できるようにした。次第に自ら指先に力を入れてちぎる姿が見られるようになり、最終的にはスズラテープを縦にさくこともできるようになった。



冬にははさみを使った制作を取り入れた。まずは持ち方や約束事を丁寧に伝え、安全への意識を育てながら一回切りに挑戦した。家庭での経験の差は見られたものの、繰り返し取り組むことで、年度末には半数の子どもが連続切りで直線を切ることができるまでに成長した。



②遊び

【粘土】

当初は、大きな塊をちぎる、握るといった単純な動きが中心であった。しかし、次第に小さく丸める、細長く伸ばすといった指先をより細かく使う姿が見られるようになった。さらに、「ケーキ」「雪だるま」「車」など、自分の思い描いたイメージを形にしようとする姿へと発展していった。保育者に「作って」と求める姿も見られたが、保育者の手の動きをよく見てまねる中で、次第に自分で作ろうとする姿へと変化した。その過程で、活動に向かう集中力が高まり、思うように形にならなくても、諦めずに取り組もうとする姿も見られるようになった。こうした経験を通して、子どもたちは自分でイメージしたものを形にして表現できる楽しさを味わうことができた。



【ブロック】

進級当初は、ブロックを積み重ねること自体を楽しむ姿が中心であったが、次第に「おうち」「車」「ケー

キ」など、具体的なものをイメージしながら作る見立て遊びへと発展していった。また、「ここはタイヤね」「ここはドアにしよう」などと友達とやりとりしながら、協力して作る姿も増えていった。一人で作る遊びから、イメージを共有しながら共に作り上げる遊びへと変化していった。その結果、作品の大きさや構成も徐々に広がり、より複雑でまとまりのあるものへと発展していった。



【星の紐通し】

初めは、小さな穴に紐を通すことが難しく、紐通しとしてではなく、並べたり積み重ねたりして遊ぶ姿が多く見られた。そこで、サランラップの芯など穴の大きい素材を用意し、「通す」経験を十分に重ねられるようにした。無理に小さな穴へ挑戦させるのではなく、段階を踏んで取り組めるようにしたことで、集中して繰り返し取り組む姿が見られるようになった。また、手先の動きが安定してくると、通すだけでなく、ドミノのように並べたり、ピラミッドのように積み重ねたりと、自分なりに遊びを発展させる姿も見られた。手指の育ちが遊びの広がりへと繋がっていったと考えられる。



【おせんたくごっこ】

人形遊びを好む子どもたちの姿から、室内に紐を張り、洗濯ばさみを使った遊びを設定した。初めは、洗濯物を挟むこと自体を楽しむ姿が中心であったが、次第に「ママがやってる」などと言いながら、洗濯物を畳む真似をする姿も見られるようになった。単に指先を使う遊びにとどまらず、自分の生活経験と結びついた見立て遊びへと発展していった。手指の育ちが、生活の再現や役割意識の芽生えにもつながっていったと考えられる。



【新聞紙遊び】

新聞紙をしっかりと握り、引っ張る中で、「破く」という動作を経験した。初めはうまく力が入らず、破れない姿も見られたが、繰り返し取り組むことで、徐々に指先や手のひらに力を込められるようになっていった。また、保育者と「せーの」と声を合わせて破ることで、力の入れ方だけでなく、動きを合わせる協応動作も楽しみながら身につけていった。単純な遊びの中にも、握る・引っ張るといった基礎的な手指の動きが含まれており、遊びを通して自然に力の調整を学んでいく姿が見られた。



遊びの全体を通して、子どもたちは《握る、つまむ、通す、はさむ、引っ張る、切る》といった多様な手指の動きを、生活や遊びの中で繰り返して経験した。その積み重ねが、制作面だけでなく、着脱や箸の使用など日常生活の自立へと確実につながっていった。

③衣類の着脱

春から体操着のズボンの着脱に取り組んだが、当初は「できない」と諦める姿も見られた。そこで、子どもの意欲を損なわないよう、さりげなくウエストを少し下げたり、前後を整えたりする援助を行い、「自分でできた」という感覚を大切にしたい。トイレトレーニング中であったこともあり、日々繰り返し着脱を経験する中で、徐々に動きが滑らかになっていった。冬からは制服登園が始まり、ボタンの留め外しに挑戦した。最初は難しさを感じる子もいたが、「穴を広げて、ここから入れるよ」と具体的に伝えながら一緒に行うことで、次第に一人でできる子が増えていった。これまで取り組んできた紐通しなどの遊びが、確実に生活動作へと結びついていることを実感した。楽しい雰囲気の中で取り組むこと、そして小さなできたを丁寧に認め、子ども達の自主性を育てることを常に心掛けた。



④食事

【箸の使用】

当初は、箸を用いず、スプーンやフォークを使用することから始めた。まずはスプーンやフォークを用いて「すくう」「刺す」といった基本的な動作を十分に経

験できるようにした。これらの経験を通して、徐々に指先で物を扱う力や手の安定性が育まれていった。その後、発達に応じて箸の使用へと段階的に移行した。箸の使用においては、最初は大きく滑りにくい食材から取り入れ、無理のない範囲で「挟む」動作を経験できるようにした。こうした関わりの中で、箸で食べ物を挟もうとする姿が見られるようになり、成功体験を重ねることで「自分でできた」という自信の形成にもつながっていった。以上のことから、箸の使用は単なる食事動作の習得にとどまらず、指先の細かな動きの発達や力加減の調整、さらには自立心の育成とも深く関連していると考えられる。



3. まとめ

遊びと生活は切り離せないものであり、日々の経験の中で互いに影響し合いながら子どもたちの成長を支えていることを改めて感じた。一年間、指先を使う活動を意識して取り入れてきたことで、子どもたちの姿には大きな変化が見られた。進級当初は、紙をうまく

ちぎれない、ズボンの着脱に時間がかかる、道具を正しく持てないなど、手指の操作に難しさを感じる姿が多く見られた。しかし、制作や遊び、日々の生活の中で繰り返し経験を重ねることで、少しずつ動きが安定し、「自分でやってみよう」とする意欲が育っていった。特に生活面では、トイレトレーニングや制服の着用など、日常的に指先を使う機会が多かったこともあり、着脱やボタン留めが着実に上達していった。遊びの中で行ってきた紐通しや洗濯ばさみの経験が、生活動作につながっていることも確認できた。

また、指先の発達とともに、遊びの内容にも変化が見られた。粘土やブロックでは、単純な操作から「〇〇を作りたい」というイメージをもった遊びへと発展し、友達と簡単なやりとりをしながら協力する姿も増えていった。

指先の育ちは、単に“手先が器用になる”ことではなく、

- ・自分でできたという自信
- ・やってみようとする意欲
- ・友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じる

に繋がっていることを実感した。

今回の実践を通して、発達に応じた環境を整え、楽しみながら繰り返し経験できるようにすることの大切さを改めて学んだ。特に、指先の発達のために特別なトレーニングや特別な道具を用意するのではなく、日常生活の中でのささいな動作や遊びの中から多くの学びが生まれることを実感した。子どもたちは、手を使って物をちぎったり丸めたり、道具を使ったりする中で、自然と指先の力や動かし方を身につけていく。その積み重ねこそが、手指の発達や集中力、さらに人との関わりや自立につながる基盤となる。今後も、生活と遊びの両面から手指の育ちを支え、子どもたちの自立や人との関わりへとつながる保育を心がけていきたい。